

創造的表現活動を用いた対話について アートベース・リサーチにおける省察を基に

伊 東 留 美

1. はじめに

体験学習は、「気づき」の学習（星野、2005, p.171）ともいえる。体験学習の学習過程におけるふり返りの時間は、「今ここ」でのグループ、他者、自分自身のあり様に気づき、そこからどうありたいのか、どうしたいのかを検討し新たな挑戦へと繋げ、変容する、すなわち成長するステップへと繋げていく時間でもある。そのふり返りに創造的な芸術表現を用いる場合もある。近年は、そうした創造的な芸術表現を用いた研究に関して関心も高まっている。創造的表現活動を主な手がかりとして探究を進める研究方法や研究そのものに対して、「アートベース・リサーチ（アーツベース・リサーチ）：ABR」と呼び、教育学、社会学、臨床心理学（芸術療法を含む）などの領域で展開されている（McNiff, 1998；Leavy, 2009；Barone & Eisner, 2012；笠原、2019；岡原、2020；小松、2023）。

本論では、ABRの基にある知ることや省察することについて説明し、グループの中で行われた創造的表現活動が個々人のふり返りにどのような影響を及ぼしえるかを考察する。ABRにおける「知」や「省察」に着目し、グループ活動で実施した創作活動と作品を使って対話する体験が個人のふり返りに与える影響について考察していく。

キーワード：アートベース・リサーチ（ABR）、創造的表現活動、対話、知、省察

2. 対話する創造的表現活動¹

いかなる芸術表現もその始まりをたどると、古代の人間の営みにさかのぼることを否定することはできない。人間の生活の営み自体も芸術活動と繋がるこ

¹ 本論のタイトルに含まれる「創造的表現活動」とは、芸術活動と言い換えることもできるが、ここでは作品の良し悪しや上手い下手を問うものではなく、自らの身体的感覚やイメージを用いて自由に表現する活動を指す。

とをランガー（2020）は指摘している。彼女は、芸術活動の中で特に音楽に注目し、その起源は芸術としての音楽ではなく、仕事や儀式の中で精神的な高揚感を高めるため、また呪術的目的で用いられた可能性を指摘している。音楽の起源は人間の日常の営みの中で「仕事のリズムや踊りの拍子、そして一緒に声を合わせての詠唱」（p.462）のような原始的なものであり、そこに「潜在的な『主題』、つまり芸術的想像力」が音楽という形へと誘うことを述べている。音楽として成立する前からリズムは存在し、鍛冶屋の作業場から聞こえる音や漁師が網を引くときの声の掛け合いや農夫が地面を耕す鋤の振り方など、それらが生み出す動きや音はリズム感に満ちている。自然界の音（鳥の音、川のせせらぎ、雨音など）の刺激や人間の営みに応え、からだが生む音や動きは芸術の主題を形成する土壌であり、「原シンボル」（ランガー、2020、p.463）と呼ばれる。そのように考えると、個人が「今ここ」での営みの中で体験する感覚は表現される何かの源とも捉えることができる。それは、日常にある自然や環境との対話とも言えるだろう。

次に、創造的表現は個人の身体との対話を可能にしてくれる。つくり手が動かなければ作品は生まれない。芸術活動の中でもダンス、音楽、芝居などは今ここで動きがつながり全体をつくる。一方で、視覚的芸術（描画や造形）における身体面についての意義は（アクションペインティングは別かもしれないが）あまり語られることはない。でき上がった作品に注目が寄せられ、作品自体と作者の創作過程の体験が同時に語られることは少ない。しかし、創作過程はからだの動きがあってこそ成立する。視覚的芸術においては、そこに道具（筆やはさみなど）や素材（紙、絵具、布など）が介在する。こうした道具や素材を用いて、自身のイメージを現実的に表現する時、身体はその表現をユニークな存在にさせてくれる。たいていの作品の筆跡や筆圧、色具合などから、みる側の感覚を刺激し、つくり手がどう感じたのか、またどのような動きをしたのかについての想像をめぐらすことはできる。美術教育における学びについて論じる小松（2018）は、美術制作は「素材や技法という制約とイマジネーションの自由な働きとの循環の中で初めて生み出されるもの」（p.52）と捉えている。描画や造形を心理治療として用いるアートセラピーでは、自由に素材を選択するつくり手の選択は、その素材の特性に対する反応でもあり、その素材からつくり手の感覚が引き出され、自身のイメージと素材がやり取りをしながら作品へと形成されていくと考えることができる。

そして、創造的表現としての作品は対話（コミュニケーション）を必要とする。芸術作品はみる側に何かしらの感覚的な刺激を与えてくれる。みる側は、その感覚から「暖かい」「ほんわかした」「するどい」などの印象を抱く。そうした作品とみる側の対話が起きる。また、作品はみる側同士が対話をするきっかけを作る。昨今、美術教育の現場や美術館では「対話型鑑賞」（鈴木、2019）という鑑賞方法が取り入れられ、児童生徒が自由に作品から感じ取ったことをお

互いに話しあう活動が奨励されている。解説を読んで作品を理解するのではなく、自分で実際に見て感じて、連想したことや疑問に感じることを同じ作品を鑑賞する他者と話合う。そこからお互いのとらえ方の違いを学び知見を広げる体験にもなる。みる側がどう捉えるか、なぜそう感じるのかに注目する鑑賞の仕方、「アート思考」(末永、2020)が提唱されている。このような美術鑑賞の仕方は、一つの正しい解釈を求めず個々人の違う答えに寛容である。むしろ自問し自分なりの答えを探す、内なる対話を奨励する。「教えるのではなく、『問い』によって主体的な学びを引き出す」(鈴木、2019、p.41)ことが対話型鑑賞であり、コミュニケーション能力や論理的思考などの能力向上にも役立つと考えられている。

心理臨床の場面で用いられる創造的表現活動や作品は個人のこころや個人のあり様を映し出す鏡にもなりえる。心理検査として投影法が用いられるのもその理由からである。例えば、バウム・テストを展開したコッホ(1970)は、ヘルマン・ヒルトブルンナーの文章に触れ、樹木画について述べている：樹木を表面的に描くのではなく、表現者の内側から生まれてくる樹木を描いている。バウム・テストは「心の“投影”であり、現れてくるものは、正確に言って、“顔”ではない」が、表現者の心のあり様、自身の存在のあり様を「深層とごく表層とのみごとな混合」(p.5)で表現し、表現者を理解することを助けてくれる。

芸術を心理療法に用いる芸術療法では個人の身体感覚や想像力を使って、その人にしかできない創造的表現活動を奨励している。作品に現れたイメージをセラピストとクライアントが共に対話し象徴化されたものをことばにしていく過程で自己理解が深まったり、問題が明確化されたりする。ここでの対話は治療を目的とした対話であり、対話型鑑賞と異なる点でもある。治療現場での対話はクライアントが自身に対する気づきや変容に対する心理的支援としての対話であり、共感的態度の中での対話でもある。つくり手であるクライアントの治療の手助けとなることを願って行われる。こうした芸術療法では、創造的表現活動や作品はセラピストとクライアントの間にあり、クライアントとセラピスト間の対話以外に、クライアントと作品、セラピストと作品、という別の関係(対話)も生まれる。

3. アートベース・リサーチ (ABR) における省察について

(1) ABRについて

アートベース・リサーチ (art-based research) /アーツベース・リサーチ (arts-based research) (以下、ABR) は、1980年代以後欧米を中心に、主に教育学、社会学、臨床心理学(特に絵画・造形、音楽、ダンス・ムーヴメント、ドラマなどの芸術活動を用いた心理療法)などの領域で展開され、その呼び方も芸術形態も方法も多様である (Knowles & Cole, 2008)。この10年余りの間に Arts-based Research and Artistic Research学会が開催され、方法論や実践

研究などが論じられている（小松、2018）。小松（2018）は、ABRについて、「芸術における発見的（heuristic）な思考や理解によって従来の科学的な研究や知の在り方を問い直すもの」であり「自己表現や感性的なインスピレーションの産物としてのみ芸術を捉える見方に対する問い直し」（P.75）でもあると述べている。ABRは質的研究法としての位置づけから、現在は新しい別の研究法として展開している（小松、2018）。

昨今、日本におけるABRの展開は美術教育や社会学の研究者の貢献によるところが大きい。笠原（2019）はABRについて「芸術制作の特性をものごとの探究や調査、意味や価値の創出に用いていこうとする、探究的で省察的な芸術制作の用い方であり、同時に研究の方法論」（p.114）と説明する。笠原は国内でのABR研究について美術教育と社会学の研究者らの研究を紹介しつつ、教育学や社会学、演劇教育などで研究が進んでいるという見方をしている。

また、臨床心理学領域、特に芸術活動を用いた心理治療である芸術療法でもABRは実践されている。アートセラピストでもあり大学教員として大学院でABRを長く教えていたMcNiff（2008）はABRについて、あらゆる芸術形態を含み、その芸術活動のプロセスを研究者と研究に参加する者が一緒になって計画的に進める研究であり、芸術活動が研究の主体にあると捉える²。McNiff(1998)は、様々な芸術形態によって分化されないクリエイティブ・アーツセラピーが展開した中で、クリエイティブ・アーツセラピストらが自らも表現者として芸術表現をすることを奨励した。このことが芸術活動を用いた探究へと繋がったと振り返っている。クリエイティブ・アーツセラピーとは、美術、音楽、ダンス・ムーブメント、演劇、などの芸術療法からクライアントの治療にあわせて有益な創造的活動を意図的に用いる心理療法である（Ahessy, 2013）³。クリエイティブ・アーツセラピストもアートセラピストも自ら表現者として活動する者も多い。そうした表現者として、独りあるいはスーパーヴァイザーや仲間と共に、治療関係やクライアントとの葛藤などを創造的に表現し、その作品と（時には第三者としてのスーパーヴァイザーと共に）対話することもある。それ自体も、芸術活動を用いた自己探求や事例研究とも言える（McNiff, 1998；Kossak, 2013）。Kossak（2013）は、芸術療法の実践者がABRに親和性を感じることは自然な流れと捉える。芸術活動が自身を知る上での手がかりとなる

² McNiff(2008)は、ABRを説明する際に、次のように述べている。"Art-based research can be defined as the systematic use of the artistic process, the actual making of artistic expressions in all of the different forms of the arts, as a primary way of understanding and examining experience by both researchers and the people that they involve in their studies (McNiff, 2008, p.29)

³ 日本クリエイティブ・アーツセラピー学会によると、「クリエイティブ・アーツセラピー（以下CAT）は、諸芸術を治療や支援に意図的に用いる諸芸術療法の総称」と定めている。アートセラピー、ダンス・ムーブメントセラピー、ドラマセラピー、ミュージックセラピー、表現アーツセラピーなどが含まれる。（<http://www.jcata.org/aboutus/cat-intro/>参照日：2024.9.24）

ことをAllen (1995) も支持し、彼女はアトリエを開放し地域住民たちと共に創作活動を実践している。彼女はその活動の中で意図的に参加者が探求・探究すること、そのために創作活動に主体的に関わることを奨励している (Allen, 2005)。これもまた、表現者である個々人が自問しその答えを創作活動からみつけ出そうという主体的探求であろう。

このようなABRの側面は、a/r/tography (アートグラフィー) というABRの研究方法にも共有している点であろう。この研究法は美術教育者であるIrwinやSpringgayらによって展開され、芸術家としての a (artist)、研究者としての r (researcher)、教師としての t (teacher) の頭文字と、記述を意味するgraphyが合体した名前である (小松、2023)。アートグラフィーは、芸術と研究が交差する“living inquiry” (「生きる探求」⁴) (Springgay, Irwin, & Kind, 2008; Irwin & Springgay, 2008; 笠原、2019; 小松、2023) と捉えられている。アートグラフィーは、芸術家、研究者、教師のアイデンティティが同時に触れ合い (contiguity) ながら、芸術と文章の間を行き来する。また、アートグラフィーは、「絶え間なく世界に関わり合う身体を用いた方法でもある (“a methodology of embodiment, of continuous engagement with the world”) (伊東訳)」 (Irwin & Springgay, 2008, p.117)。個人の身体はそもそも役割毎に切り離されることができない。そのため、芸術家、研究者、教育者、というアイデンティティを切り離して体験を捉えるのではなく、個人が生きる中で体験をすることが研究にも教育にも芸術にも影響を及ぼし合う「生きる探求」であるという (Irwin & Springgay, 2008)。笠原 (2019) はアートグラフィーを「個人のアイデンティティに根ざした探求を様々な芸術表現を通して省察し、エスノグラフィックに描き出すことで、自己探求とアイデンティティの構築、更新を図る」 (p.122) と説明する。小松 (2023) は、美術教育の研究において、研究者の人生と研究とのつながりが明確化され、「それが他者の『生きる探求』を促していく」 (p.22) と捉える一方で、そこにABRの弱点が存在しうると指摘する。

(2) ABRにおける省察：創造的表現活動を用いた対話から生まれる知について

ABRの論点や関心事の中に、“knowledge”と“reflexivity”が含まれる。Knowledgeは、「知ること」「知識」などと訳される。また、reflexivityは、「反省」「内省」「省察」などと訳される。ABRにおいては、創造的表現活動や作品に対して内省や省察をすることで問いに対する何かを知ることにつながると捉えられる。そして、研究者だけでなく参加者もこの2つの側面を体験する。以下に、2つの概念について述べていく。

⁴ 小松 (2023) の『アートベース・リサーチの可能性』の中では、笠原の「生きる探求」と訳し、小松 (2023) は「実践のただ中における探求」 (p.21) という視点から「探究を生きること」 (p.21) との訳も提案している。

Knowledgeは「知ること」に関連して、小松（2021）は、美術制作や作品鑑賞における「芸術的知性」（p.18）に着目し、「作品制作課程での制作者による思考や探究の中で育まれるもの」であり「制作の展開につながるもの」（p.18）と捉える。そのような芸術的知性はイメージ表現が俯瞰され、身体感覚を介して捉えなおし再構築していく創作プロセスを可能にする「アトラス的な知」（p.19）であり、「一見つながりを持たないようなもの同士の結びつき」が新たな可能性へと繋げていく「親縁性」（p.21）のある知でもある。

小松の「芸術的知性」の考えは、美術教育だけでなく臨床の場においても参考になる。特にアートセラピストはセラピスト自身が芸術家として芸術活動に従事することを考えると、小松の「芸術的知性」も持ち合わせていると考えることができる一方で、全く同じであると同一視することをためらう。臨床においては人間の心の状態や病理についての知識が含まれ、芸術的知性に対して心理臨床に対する知性も含まれると考えられる。ハインツ（2023）は、素材によるクライアントへの影響を探究し、制作課程において見いだされる素材の特徴とその心理的効果などを感覚、知覚、感情、認知などの様々な側面で考察し、具体的な事例を含めて説明している。アートセラピーは、プロセス（過程）とプロダクト（作品）に対して、両者の必要性を臨床的に理解した上で、創作課程を共にする。創作過程でクライアントの精神力動を捉え、作品との関りを見守る。こうしたアートベースによるクライアントの理解を深める過程では、芸術的知性だけでなく臨床的な知性が必要であろう。

加えて、パーソンズとボイデル（Parsons & Boydell）（2021）は、“arts-based knowledge translation（KT）”（p.170）という呼び方で、ヘルスケアの専門家の間でABRによって芸術表現が知に翻訳されることの意義を論じている。ABRが臨床現場の問題に対する探究で、専門家と非専門家、異なる専門仲間間で共有できる感覚的体験を提供してくれることを指摘している。科学的探究から得られる数値や言語を超えて、感覚に訴える芸術表現は、みる側がどのようにみえるのか、捉えるのかによって、身体的に共鳴する・反発するなどのリアクションがあり、それはどこから起きるのかを考えるきっかけにもなる。みる側の主体性を伴った気づきが深まり、これまで気づくことがなかった新たな知へと繋がる。

そうした新たな知へと繋げる内的活動が内省や省察であろう。Reflexivityについては、笠原（2019）の定義では、「反省」「内省」でなく「省察」という表現が用いられている。また、小松（2018）は、芸術的省察として芸術がもたらす知の側面を論じ、「芸術それ自体が『稠密』なもの」（p.97）と捉える。稠密とは、densityと英語表記されるが、「一つのところに多くあつまること」（デジタル大辞泉）を意味する。例えば、青空を表現する時の青色は、藍色に近い青もあれば水色に近い青もある。「空の青」と言葉にしても色合いは幾通りにもなる。小松は、その稠密さは多様で多義的な芸術表現に存在することが芸術の「質的

知性」の捉えにくさでもあると指摘する。豊かな質的知性に対して、省察が重要になるといえる。

McNiffは、芸術療法、クリエイティブ・アーツセラピーなどの領域でABRを先駆けて展開した一人である。大学院生が研究で壁にぶつかり迷宮入りするような事態になることに触れ、そうした時に、自分の中だけで考えるのではなく、創造的表現活動が突破口となることを語っている（1998；2011）。McNiff（1998）は、創造的表現活動のプロセスに没頭することで、新しい何かが動き出し、頭で考えていたこととは違う何かが見えてくることを、学生たちに「書いたり、歌ったり、動いたり、描いたり、演じたりするなら、“やってくるよ”」（McNiff, 1998, p.77）⁵と伝えていた。こうした自身の今の身体感覚に委ね即興的な表現活動に集中してみることで、こうあるべきという思考がいかにか我々の自由な思考を縛っているかに気づくだろう。

さらに、省察は質的研究課程においても、研究者自身のバイアス、価値観、体験なども含めた研究者自身の立ち位置を捉えることにも繋がっている（Creswell, 2013）。Creswellは質的研究における重要な側面の1つに省察を挙げ、質的研究において資料検証、行動観察、インタビューなどのデータ収集から何をどのように引き出すのかについて、その過程で研究者の省察が重要となることを述べている⁶。ABRで研究者が創造的表現をすることの有益さは、自身のバイアスや感情体験などが対象化されることであろう。

このような省察⁷について、伊東（2018）は、研究者自身の創作活動体験を用いて、創作活動や作品から省察するプロセスを言語化する試みを行った。また、別の研究で伊東（2020）は、グループ活動後のふり返りを創作活動で表現することで省察のあり様を考察した。具体的には、ある組織のミッションを考えるというテーマで、参加者と共に創造的表現活動を実施し、その後その活動をふり返りメンバーの考えを反映させるような作品制作を行った。作品制作を介することで省察がどのように体験されるのかをアートベースで考察した。そこでは、グループ活動後、研究者自身が個人でふり返る際の制作課程を記述しながら、研究者の中で何が起きていたかを述べていった。その結果として、創造的表現によるふり返りでは（1）主観性/間主観性、（2）身体的・感覚的理

⁵ 原文は、“The students liked to hear me say, ‘If you write, sing, move, paint, and perform, it will come’”（McNiff, 1998, p.77）

⁶ Creswell（2013）は、次のように述べ、研究者の価値観や過去の体験（仕事、学校、家族関係など）が質的研究の探究過程で起きていることにも影響を及ぼす可能性や研究者の過去の体験が研究における現象をどのように解釈するかにも影響することを指摘している。“The researcher first talks about his or her experiences with the phenomenon being explored. This involves relaying past experiences through work, schooling, family dynamics, and so forth. The second part is to discuss how these past experiences shape the researcher’s interpretation of the phenomenon（p.216）”。

⁷ 伊東（2018；2020）の論文では、「内省」という表現が用いられているが、本論では「省察」に統一している。

解、(3) 共感的・親密的理解、(4) 多層性・多義性、(5) 連想的/連続的、(6) 俯瞰的という省察の特徴が見いだされた。

次に、グループ活動に参加した参加者らが創造的表現活動を行う中で、その創作過程と作品がどのように個人の省察に影響を及ぼしたかを述べていく。

5. グループによる芸術活動について

(1) 本研究のグループ活動について

本研究の対象となったグループ活動は、N短期大学の卒業生で構成される団体が主催する講座で行われた創作活動である。参加者が作品を用いて自身をふり返り、参加者同士が対話するというものであった。筆者がN短期大学の卒業生の団体から講座講師を依頼され、芸術表現を用いた講座を企画し「私のことを現在・過去・未来で話してみませんか」というテーマの講座を開催した。団体が運営するインターネットサイトから参加者を募集し、10名の申し込みがあった。講座に申し込みをされた参加者には事前に研究のためのアンケートをお願いすることを伝えた。そして、筆者が所属する大学の「人を対象とする研究」倫理審査に承認された後、参加者にも研究の目的と調査方法を説明し同意書を用いて参加の同意意思を確認した。

講座はX年1月末の週末の午後に開催された。開催場所は、N大学のカーペット敷きの教室で、教室内は土足厳禁で靴を脱いで入る部屋である。10名の申し込みがあったが1名が欠席し9名の参加となった。実施前に、教室にテーブルを2台中央に置き、そこに、雑誌、のり、はさみ、クレヨン、色鉛筆、シールなどを並べた。また、雑誌の写真やイラスト、文字などを予め切り抜いておいたものをケースに入れてテーブルに置いた。また、実習に使われる画用紙でつくった台紙を事前に作成した。(作り方は動画を参照:「くるくると絵が入れ替わる6角がえし!」参照日:2024年3月12日 <https://www.youtube.com/watch?v=i3qyqS24yG4>)

当日は、最初に講師である筆者が講座のねらいと進め方の説明を行った。講座のねらいは、①短大時代の学びが個人にどのような変容を促したかをふりかえる、②卒業生が集まり、近況や心境などを分かち合いながら、お互いのエンパワーメントを促すことであった。

まず、台紙の1面に「現在の自分」について色や形、イメージなどで表現した。具体的には、現在の自分の状況、立場、気持ちなどを表わしているイメージや色や線などを切り抜きやクレヨン、マーカー、色鉛筆など自由に画材を選んで表現するよう促した。全員が概ねでき上がったところで、ペアになりお互いの自己紹介をした後、でき上がった作品について話をした。次に、台紙の裏側の面を使って、「過去、特に人間関係科時代の自分」について振り返り、どんな自分であったかを1回目と同じようにイメージで表現をした。でき上がったところで、異なるペアになり、同様に作品について話をした。最後は、台紙を折

り返し、3つ目の面を出し、そこに「これからの私」として、どう生きたいのか、どんなことをしたいのか、チャレンジしたいことは何かなど、自由に表現してもらった。全員ができ上がったところで、また違うペアになりお互いに話をした後、メッセージカードにコメントを書いて交換した。時間が足りず、全体での話し合いはできなかった。(実際の作品については、雑誌の切り抜きを使ったコラージュ技法を使って作成されているため、本稿の掲載はしない。)

講座終了後、参加者にアンケートをお願いした。アンケート(資料3)は、作品作りを体験し、芸術的表現がどの程度過去の振り返りを話すのに役に立ったのかを尋ねる内容であった。

6. 調査方法

本研究では、グループでの創作活動と作品がどのように個人のふりかえりに役立ったかについて質問紙を用いて行われた。質問については以下の項目である。(資料参照)

- ・ 作成時間の適切さと作品課題の難易度
- ・ 作品を用いて話をするものの有効さ
- ・ 作品を用いてふりかえるものの有効さ

活動終了後、参加者にアンケート用紙を配布し記入してもらい、その場で用紙を回収した。自由記述については、設問ごとに分け自由記述の内容に応じて分類し考察した。

7. 調査結果

本研究では、芸術的表現を体験してもらい、参加者の表現体験がどのように振り返りに効果があったのかをアンケート用紙に記入してもらい、その回答を用いて探った。作成時間の適切さと作品課題の難易度については資料4を参照してほしい。

(1) 作品を用いて話をするものの有効さについて

アートワーク(作品)を見せながら話をするのがどの程度参加者が話す際に役立ったのかについてたずねた。「役に立った」が7名、「まあまあ役にたった」が2名であった。作品に表現されたイメージがあることで、言葉による説明を補ってくれる体験をした参加者もいた。「なにも無しで自分のことを語るのは得意ではないので助かった」「作品を見てもらうことで説明がより理解してもらえたと感じる」「人に伝える時に、アートワークを見ながらだとわかりやすい」という記述があった。すでにある雑誌に掲載された絵や写真を用いることで抵抗も少なく表現できたようである。また、でき上がった作品は、対象化されるため、作り手自身もイメージの可視化ができ、他の参加者にもその作品と共に自分のことを伝えることができた。そうした作品は、作り手のことを具

体的かつ感覚的に表すことができると言える。この「見える化」はつくり手だけでなく、鑑賞者にも理解の手助けになったことももうかがえる。

また、作品によって自分が言いたいことに的が絞られた感覚を体験した参加者もいたようだ。「普段何となくぼんやりと感じていることがとてもはっきりして過去の自分に対してもよくやったね、ご苦労さんという気持ちになれる」「作業を進める中で、やろうとしていることが明確になってくるような感じがあり、素材とワークに助けられた」という記述があった。また、創作過程で自分をふりかえることに意識を向けた参加者もいた。「作品をつくっているプロセスがそのテーマを自分でふりかえりながら内的会話がおこっていた」という記述があった。

(2) アートワークがふり返る時にどの程度役立ったのかについて

「役に立った」が7名、「おおむね役に立った」が2名であった。楽しいという感想もあり、この活動自体が不快とならず安心して楽しくできるものであったとみられる。「まず、とても楽しかった」「作品を作ることに意識がむきすぎてしまった」「話が苦手でも安心感があった」という記述があった。また、過去の体験をふり返る時に感覚的に捉えようとする様子も記述から伺えた。「自分についてをインスピレーションも含めて考えることができた気がする」「自分の気持ちにピッタリな素材を探そう」とした、ふり返る過程で、明確化されることに対して有益であったという理由もみられた。具体的には、「ぼんやりと感じている事がとてもはっきり」した、「視覚的なものの素材があることで自分の言語化が助けられた」「自分の中にあるものを具体化できる」という記述があった。また、気持ちの整理をするうえで役だったとして、「自分の気持ちを整理できた」「自分が今の状態について感じていること、これからしたいことなど(整理できた)」「『自分の思いに近いもの』を選んだと表明することができた」という記述があった。

8. 考察

本研究における創作時間と創作内容については、大半の参加者は困難と感ずることなく、楽しく取り組むことができたとふり返っている。課題の提示の仕方が曖昧であったことで質問をされた参加者もいたが、表現の仕方については抽象・具象どちらでもよく自由であり、感じたことや考えたことにピッタリと感ずるイメージ、写真、イラスト、言葉を使ってもよいし、いくつかの側面を取り上げてもよいことを伝えた。そこで、自由に自身を捉え表現することが許されていると理解し進むことができたようであった。「少し漠然としたお題にも感じました」や「いくつもあってもいいんだとわかって進められました」という記述からも、参加者が自由さに対して戸惑っていたことがわかる。一方でその自由さに柔軟に応じることができたようだ。そうした、場に対する寛容さを

参加者が持っていたことが読み取れる。「ニンカン生にとっては、ちょうどよいかんじ」という記述があった。今回の参加者は、短大時代に体験学習の学習方法を体験したことがあり、こうした実習後にお互いに話し合う体験を授業でも行ってきた。そうした体験をふりかえることに慣れ、感覚的な表現活動や感情レベルの言語表現に学生時代に体験してきた参加者であったことも影響はあると捉える。

作品を用いたふり返りについての自由記述から考察すると、大きく3つの点について有益といえる：①視覚的刺激に対して、感覚的に共鳴し自分が抱く思いにより近づけること、②自身の気持ちや感情を整理・明確化し、言語化を促すこと、③イメージに触発され記憶がよみがえること。

① 視覚的刺激に対して、感覚的に共鳴し自分が抱く思いにより近づけること

参加者は自由な創作活動の中で、「インスピレーション」を感じる、「ピットリナ」素材や表現を探したり、「自分の思いに近いもの」をその場にある雑誌の切り抜きや折り紙やクレヨンなどの素材から選んでいく。自らの感覚に共鳴する選択が対象となる素材にあることがわかる。どのような素材を提供するかは目的や場面によっても異なる。描画作成に苦手感を抱く参加者が多い場合など、コラージュのような素材を用意することで安心感が増すと思われる。

② 自身の気持ちや感情を整理・明確化し、言語化を促すこと

参加者らは、講座の中で「現在・過去・未来」の私を捉え、それをイメージで表現をした。現在については、今の自分の状況やそれに伴う感情、価値観や考え方など、今の自分の存在をイメージで表現するという課題であった。参加者の記述にあるように、素材から触発され自分の感覚に近いものを選びそれを使って表現することで、今の自分自身を表現する体験となった。過去については、短大時代の体験からと限定をした。それによって参加者は短大時代の体験を思い出し、感じたことをイメージを頼りに想像力を用いて再体験していった。そして、未来については未知であり、参加者は自分の未知な部分を現在と過去をふり返った後に構築していく。「私はどのような人生を送りたいのか」という問いに対する知を生成するわけだが、それは過去や現在から切り離されない、むしろ一環としてある未来を切り開く知でもあろう。秩序なく混沌とした体験の記憶から必要なものを選択していく過程で、記憶の整理や価値観、考えの整理が自然と並行して行われることに参加者も気がついたようだ。

③ イメージに触発され記憶がよみがえること

記憶にあることは何かのきっかけで連鎖してよみがえることがある。素材はそうした刺激を与える存在でもある。コラージュのために切り抜いて写真やクレパスの色なども刺激となったといえる。

9. まとめ

今回のコミュニティでのグループによる創作活動は講座としての位置づけであった。その学びの中で、安心して創作活動ができたと感じることができたのは、素材もだが参加者らが相互にうまい下手という評価的態度で作品を見ようとしていなかったことが理由であろう。そうした安心できる環境の中で、創造的表現を用いてふり返り、自己理解を深めたり自身の気持ちを明確にすることができた。

こうした芸術作品がふり返りを手助けしていると言えるのは、創作過程からでき上がった作品までの間、そしてでき上がった作品に対してのふり返りの中で、作品との対話が個人内で起きているからだといえる。作品自体は語らないが、作品を目の前にした個人は、自身の想像力を使って、その作品が何を伝えたいのか、どのような印象を抱くのかなどを感じとる。そして、その場にいる参加者たちは、「ウィットネス (witness)」(Allen, 2005, p.61)として創作過程を共にし、個々人の作品についての語りに耳を傾ける。ウィットネスは日本語で「目撃者」と訳されることがあるが、目撃する者は実際に起きていたことをみるが口をはさむことはない。星野 (2005) は、「気づきは、本来的にいって、その人自身が気づいたときに成長につながるものであって、誰かが強制的に気づかせるものではありません」(p.172)と指摘するように、作品をふり返る時の個人の省察を支える立場として共にいる存在といえるだろう。

謝辞

本研究において、調査をさせていただいた講座に参加された9名の方々に深く感謝申し上げます。講座の創作活動にも積極的に参加くださっただけでなく、研究についてもご理解くださりご協力くださいました。

引用文献

- Ahessy, B. Creative Arts Therapies: what psychologists need to know. *The Irish Psychologist*. 39 (11). 274-281.
- Allen, P.B. (2005). *Art is a spiritual path*. Shambhala.
- Allen, P. B. (2013). Art as enquiry: Towards a research method that holds soul truth. In McNiff, S.(ed.) (2013). *Art as research: Opportunities and challenges*. (pp.11-18). Intellect.
- Barone, T. & Eisner, E.W. (2012). *Arts based research*. Sage.
- Creswell, J.W. (2013). *Qualitative inquiry and research design: choosing among five approaches. Third edition*. Sage
- Eisner, E. (2008). Chapter 1. Art and Knowledge. in In Knowles, J.G. & Cole, A.L. (2008) *Handbook of the Arts in Qualitative Research: Perspectives, Methodologies, Examples, and Issues*. (pp. 3-12). Sage.

- Hinz, L.D. (2020). *Expressive therapies continuum: a framework for using art in therapy, second edition*. Taylor & Francis. (ハインツ・リサ、2023、『アートセラピー実践ガイドークライアントに合わせた素材の選択から活用まで 誠信書房』)
- Irwin, R.L. & Springgay, S. (2008). Chapter 9. A/r/tography as practice-based research. In Cahnmann-Taylor, M. & Siegesmund, R. (Eds). *Arts-based research in Education: Foundations for practice*. (pp. 103-124). Routledge.
- Kossak, M. (2013). Art-based enquiry: It is what we do! in McNiff, S.(ed.) (2013). *Art as research: Opportunities and challenges*. (pp. 19-28). Intellect.
- Leavy, P. (2009). *Method meets art: arts-based research practice*. The Guilford Press.
- McNiff, S. (1998). *Art-based research*. Jessica Kingsley Publishers.
- McNiff, S. (2008). Art-based research. In Knowles, J.G. & Cole, A.L. (2008) *Handbook of the Arts in Qualitative Research: Perspectives, Methodologies, Examples, and Issues*. (pp.29-40). Sage.
- McNiff, S. (2011) Artistic expressions as primary modes of inquiry. *British Journal of Guidance & Counseling*. Vol. 39 (5). 385-396.
- McNiff, S.(ed.) (2013). *Art as research: Opportunities and challenges*. Intellect.
- Knowles, J.G. & Cole, A.L. (2008) *Handbook of the Arts in Qualitative Research: Perspectives, Methodologies, Examples, and Issues*. Sage.
- Springgay, S., Irwin, R.L., & Kind, S (2008) A/r/tographers and living inquiry. In Knowles, J.G. & Cole, A.L. (2008) *Handbook of the Arts in Qualitative Research: Perspectives, Methodologies, Examples, and Issues*. (pp. 83-91). Sage.
- 伊東留美. (2018) . アートベース・リサーチの展開と可能性についての一考察. 『南山大学短期大学部紀要』 終刊号. (203-213)
- 伊東留美. (2020) . 創造的表現を用いた内省的実践についての一考察ーアートベースによる考察の試み. 『人間関係研究』 第19号. (71-87)
- 笠原広一. (2019) . Arts-based researchによる美術教育研究の可能性についてーその成立の背景と歴史及び国内外の研究動向の概況からー. 『美術教育学』 第40号. (113-128)
- 小松佳代子 (編) . (2018) . 『美術教育の可能性ー作品制作と芸術的省察』 . 勁草書房
- 小松佳代子. (2021) . 美術製作における芸術的知性の涵養. 『美術・工芸の制作-教育実践研究』 18. (18-27)
- 小松佳代子 (編) . (2023) . 『アートベース・リサーチの可能性ー制作・研究・教育をつなぐ』 . 勁草書房
- C.コッホ (著) 林勝造・国吉政一・一谷彊 (訳) . (1970) . 『バウム・テストー樹木画による人格診断法』 . 日本文化科学社

- 岡原正幸（編）. (2020). 『アート・ライフ・社会学 エンパワーするアート
ベース・リサーチ』. 晃洋書房
- S.K.ランガー（著）塚本明子（訳）. (2020). 『シンボルの哲学－理性、祭礼、
芸術のシンボル試論』. 岩波書店
- 鈴木有紀. (2019). 『教えない授業－美術館発、「正解のない問い」に挑む力
の育て方』. 英治出版
- 末永幸歩. (2020). 『13歳からのアート思考－自分だけの答えが見つかる』.
ダイヤモンド社
- 星野欣生. (2005). 43. ふりかえりについて 津村俊充・山口真人（編）『人
間関係トレーニング 第2版』ナカニシヤ出版 pp.171-172

私のことを現在・過去・未来で話してみませんか

<本日の内容>

13:30 はじめに

- ・講座のねらい
- ・進め方の説明

13:40 ステップ1

- ・“今の私”を表現すると・・・
- ・“私の今”を話してみる

小休憩



14:15

ステップ2

- ・“ニンカンでの私”を表現すると・・・
- ・“ニンカンでの私”を話してみる

小休憩



15:10

ステップ3

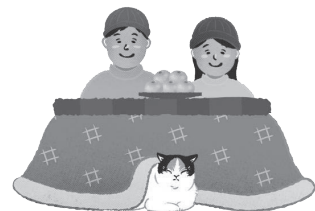
- ・“これからの私”を表現すると・・・
- ・“これからの私”を話してみる

小休憩

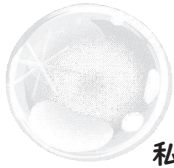
16:00

まとめ

- ・コメント
- ・質疑応答
- ・アンケート回答



資料1



私のことを現在・過去・未来で話してみませんか

ねらい：

- ・ での学びが個人にどのような変容を促したのかをふりかえる
- ・ 卒業生が集まり、近況や心境などを分かち合いながら、お互いのエンパワーメントを促す
エンパワーメント： 「庇護」や「救済」ではなく、本来の権利や人格を保つために力を付与する（エンパワー）
という考え（「知恵蔵」より）

1. ステップ1：“今の私”を表現すると・・・

- ・ あなたの表現から気づいたことを書いてください。



- ・ あなたが話をした後、気づいたことを書いてください。



2. ステップ2：“ニンカンでの私”を表現すると・・・

- ・ あなたの表現から気づいたことを書いてください。



- ・ あなたが話をした後、気づいたことを書いてください。



3. ステップ3：“これからの私”を表現すると・・・

- ・ あなたの表現から気づいたことを書いてください。

- ・ あなたが話をした後、気づいたことを書いてください。



資料2

私のことを現在・過去・未来で話してみませんか

アンケートのお願い

本日は講座に参加くださり、ありがとうございました。今回の実習についてご参加くださった皆様のご感想を伺いたく、以下のアンケートにご協力いただけますと幸いです。今後の私の改善点として参考にさせていただきます。

1. 今回のアートワークについて（○で囲んでください）

・作成時間は・・・ 長い 適切 短い

その他（理由）：

・作成内容は・・・ 難しい 適切 優しい

その他（理由）：

2. アートワーク（作品）を使って話をするについて（○で囲んでください）

・どの程度アートワークが役に立ちましたか？

役に立った ままあ役だった どちらでもない あまり役立たなかった 役立たなかった

・その理由を書いてください

3. アートワーク（作品）を作って振り返ることについて（○で囲んでください）

・その程度、アートワークが役に立ちましたか？

役に立った ままあ役だった どちらでもない あまり役立たなかった 役立たなかった

・その理由を書いてください

4. この実習の体験をもとに、での学びについて探ってみたいと思います。皆さんも一緒に探ってみませんか？おしゃべり会のような形で、学びを語りながら私がそれをまとめさせていただければと考えています。一緒に、探ってみても良いとお考えくださる方、いかに連絡先を教えてください。私の方から連絡をさせていただきます。

連絡先：（メールアドレスあるいは携帯電話番号）

以上のアンケート内容の回答については集計した結果を研究に使わせていただく可能性があります。その場合は匿名で扱います。その際、南山大学の倫理審査委員会の承認を経たのち、改めて同意書をお送りします。

氏名 _____

資料3

資料4：アンケート結果（参加者9名）

1. (1) 今回のアートワークについて (○で囲んでください)	長い	適切	短い
・作成時間は・・・		8	1 (1)

1. (2) 今回のアートワークについて (○で囲んでください)	難しい	適切	優しい
・作成内容は・・・		9	0

2. アートワーク（作品）を使って話をする事について (○で囲んでください)					
・どの程度、アートワークが役に立ちましたか？	役に立った	まあまあ役だった	どちらでもない	あまり役立たなかった	役立たなかった
	7	2			

3. アートワーク（作品）を使って振り返ることについて (○で囲んでください)	役に立った	まあまあ役だった	どちらでもない	あまり役立たなかった	役立たなかった
	7	2			